

狭い門

震災を越えて

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。学長の郡司隆男と申します。大学を代表して一言お祝いの言葉を述べたいと思います。

新入生の皆さんの多くは阪神淡路大震災の直後に生まれたこととなります。神戸や阪神地区出身の人たちは、まだ周りの被害の傷跡が残っている中で育ち、まだ幼かったので直接覚えてはいなくても、周りの人たちから当時の話を聞かされてきているのではないかと思います。そうであるからこそ、3年前の東北の震災に際しても、自分たちの身に引きつけて感じることができたのではないかと思います。

保護者の方々は、そのような中でお子さんを育て、大学生となるまでにこぎつけられました。そのご苦勞を思い、今日の日を迎えられたことに心からお慶びを申しあげたいと思います。

「松蔭」という学校

皆さんの入学した、この神戸松蔭女子学院大学という学校は、122年前にイギリスから神戸に来た、フォスという宣教師によって作られた女学校が元となっています。はじめは英語と和裁を教えたそうですが、外国語と日本の文化を同時に教えたという点に、物事を一面的に見ないという、面白い特徴があると思います。

122年前に、すでに、この大学の特徴である、「神戸」「キリスト教」「女子教育」という3つの要素が揃っています。ある意味では、この3つの意味付けを、それぞれの時代においてやってきたのが、この大学の歴史であると言ってよいかもしれません。

ちなみに、この3つの要素のうち、「神戸」と「女子」というキーワードは大学名に入っているのだからわかりやすいのですが、その間の「松蔭」とは何か？と知っている人もいない人もいます。これについて、私たちが聞いているのは、松の木蔭で、少女たちが勉強したり、楽しそうに話したりしている、そういう姿をフォス宣教師が理想的な姿として捉えたからだという事です。松というのは日本的なものですが、それを背景に、英語やキリスト教という西欧の文化を学んでほしい、そういう創立者の思いが感じられる逸話だと思っています。

女学校のできた明治のころは、学問は主に男子が学ぶものとされていました。その中で、英語やキリスト教などという、限られた科目ではありますが、女子教育の重要性を訴えた人たちが、外国人にも日本人にも多くいて、同じような時期に、日本のあちこちで、女子を対象とした学校ができました。去年の「八重の桜」を見ていた人もいないかと思いますが、当時は、女子にも教育が必要だということを常識とするのに、大変な苦勞があったのです。

女子大の「使命」

それから100年以上を経て、時代は少しは変わったでしょうか？ 今では、もちろん、教育は男女平等に与えられていますし、義務教育の先の、高校への進学率も、男女ともほぼ

100%です。また、大学への進学率も男女でそれほど大きく変わるわけではありません。

しかし、男子のみが行くことができる男子大学というものは存在せず、大学には男女共学の大学と女子大学があるのみ、短大はほとんど女子だけ、という点で、男女の教育を受ける環境が大きく異なっています。

なぜ、すべて共学の大学にならないのでしょうか？それは、今の日本では、まだまだ、女子だけの教育の必要性があるからです。

大学での教育は、基本的には、一人前の社会人として世の中に出ていくことのできる人間を育てることにあります。ほとんどの人は日本という国の中の社会に出ていくことになるでしょうから、日本の社会できちんと生きていける人を育てる必要があります。

現状の日本の社会は、残念ながら、いろいろな面で、男女が完全に同等に扱われてはいません。最近でこそ、男性社員にも育児休暇をとらせることが広がり、「イクメン」男子が増えつつありますが、結婚した後の家事や育児が圧倒的に女性の肩に負わせられているのが現状です。また、会社の中でも女性には補助的な仕事しか与えられないということもあるでしょう。

少し大袈裟かもしれませんが、そういう社会の現状をそのままに認めてしまうのではなく、それに反抗し、変えていこうとする強い女性を育てることが、今日の女子大の使命ではないかと、思っています。

チームワーク

大学での勉強は、教室に座って講義を受けるだけでなく、「ゼミ」と言って、少人数で議論したり、外に出ていっていろいろ調査をしてレポートにまとめたり、という形の授業もあります。自分たちでグループを作って、チームワークで働くということも必要になります。また、授業以外でも、クラブ活動とかボランティア活動でもチームワークが大事になってきます。

そんなときに必要なのは、グループをまとめていくリーダーと、そのリーダーの意図を的確に理解してチームを実際に動かしていくフォロワーです。どちらが偉いというわけではありません。両方がチームの中において、はじめてチームがチームとしてうまく動いていくということになります。

共学の大学ですと、こういうチームワークのときに、何となく男女で役割分担ができてしまうということもあるかもしれません。リーダーは男で、女はフォロワーという分担ですね。これは、自分たちで変えていかななくてはならない今の社会の悪い面を先どりしてしまった、とてもまずい形だと思います。当たり前ですが、女子大には、教職員を除いては、女子しかいません。だから、誰もがリーダーになれる可能性があります。

もっとも、正直言って、女子大でリーダーの経験を積んだくらいでは、そのまま社会でもリーダーになれるとは限りません。現実の社会には、見えないしがらみのようなもの、いわゆる「ガラスの天井」があって、「出る杭は打たれる」のことわざのように、「生意気なやつだ」とバッシングに合うかもしれません。

でも、そうそう悲観的な面ばかりを考えてもしかたがありません。そんなときにうまく身かわして立ち回るといふしなやかさ、柔軟性も合わせて身につけていけば、多少の困難にも打ち勝っていけるでしょう。そういう点は楽観的に構えて、したたかに生きていく力を付ける努力をして頂きたいと思います。

社会に出て辛いと思っても、大学時代のリーダーとしての経験、あるいはリーダーと対等

の存在としてのフォロワーの経験があることは、自分にとって大きな力となると思います。

狭い門から入りなさい

とは言っても、どうしたらよいのか、と思うでしょう。必ずうまく行くという方法は、わかりませんし、ないかもしれません。そこで、今日は、人生で何か選択をしなくてはならなくなったときに役に立つかもしれない考え方をお話ししたいと思います。

新約聖書の「マタイによる福音書」という書物の中に、イエスのいわゆる「山上の説教」を取録した箇所があります。その中には、一般的によく使われる表現や、後で皆さんと一緒に唱える「主の祈り」なども含まれています。例えば、「心の貧しい人は幸いである、天の国はその人たちのものである。」とか、地味だけど大事なものとしての「地の塩」、栄華を極めたソロモンでさえかなわない「野の花」の美しさなどの喩えが語られています。

今日は、これらの有名なことばの一つとして「狭い門から入りなさい」という部分をとり上げたいと思います。その部分を読み上げます。

狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。(7章13)

ひところは、「狭い門」、あるいは、文語体の聖書の言い方の「狭き門」というと、大学入試がすぐに連想されました。今日では、皆さんの年代の人口が大分少なくなってきて、進学希望者と全国の大学全体の入学可能な学生の数が大体同じになってきています。そういう意味では、大学を選ばなければ、「狭き門」は昔の話ということになるのかもしれませんが。

「広い門」

それで、今日、ここで話ししたいのは、今の引用の中の「広い門」の方です。これは、広々としているので、そこから入る者が大勢いるとされています。しかし、この門は「滅びに通じる門」です。だから、入ったはいいが、そのまま滅びてしまうわけです。「狭い門」は「命に通じる門」ですが、それを見つけることのできる人は少ないとされています。

「広い門」とは何でしょうか？ 皆が行く門です。自分で考えて選んだわけではなく、皆が行くから自分も行く、という形で安易に選んだ門です。少数派であることを貫ぬき通すよりも、多数派にまぎれこんでぬくぬくと生きようという態度です。

最近の日本では、「一億総なんとか」という現象がしばしば見られますが、人と同じことをやっていれば安心なのでしょうか、あるいは人と違ったことをすることが不安なのでしょうか、誰かが不始末をしでかすと、皆でよってたかってバッシングなどということが起こります。

大学というところにはいろいろな考え方の人がいますし、いて当然のところだと考えられています。この大学も、キリスト教の愛の精神ということは基本ですが、個々の出来事についての考え方には多様性があるべきですし、一色に染めようとは誰も考えません。一人一人が少数派であってよいのです。

神戸の多様性

この点で、この大学が神戸という土地にあるということが重要な意味をもってくると思います。よく、大阪人は東京人に対抗意識をもっているとか、京都人は自分たちが一番だと思っているとか、地域ごとの性格の違いを面白く言うことがありますが、不思議に神戸人とはどういう人なのかという評判を聞きません。少なくとも悪い評判は聞きません。

これは、神戸は、京都や大阪よりもさらに西にあり、その点、そういう、よそ様の対立に対して中立的に、あるいは斜に構えて見ているという、余裕のある態度が根底にあるからなのかもしれません。

この大学に入って初めて神戸を経験する人もいるかもしれませんが、神戸では山も海も同時に視界に入ってきます。北・南という代わりに山側・海側ということもあるくらいです。そして、北野から旧居留地にかけての西欧風の建物と、それと対照的な南京町の中華街など、昔から様々な異国の要素が入ってきています。まさに神戸は多様性の街であると言えます。

多様性とは、人にはいろいろなあり方があるのだから、自分が人と違っていてもいいのだ、ということです。一人で「狭い門」から入ることに何の問題もないのです。それこそが、この神戸という多様性の街に、日本的な「松の蔭」という名前の女学校を作った、外国人宣教師であるフォス師の狙ったことではないでしょうか。日本という国に、少し前までは「異教」とされていた、西欧のキリスト教をもちこんだのも、世界的な視野をもってほしいということだったのではないかと思います。

Any Time at All

こうは言っても、人と違ったことを一人でやるなんて、とつても不安だという人が多いだろうと思います。安心して下さい。大学には皆さんの力になることを使命としている教職員という存在があります。教員、つまり先生たちと、職員、事務室などで会う人たちです。教職員というのはどういう存在なのか、それをぴったりと語った歌がありますので、紹介したいと思います。

またまたイギリスですが、The Beatles というグループのことは聞いたことがある人も多いと思います。去年、その中の一人だった Paul McCartney が来日したことで、話題になりました。今年もまた来日して野外でライブをするそうです。元気ですね。

その The Beatles の初期、1964 年、つまり今からちょうど 50 年前に作られた作品に、Any Time at All という歌があります。「いつでも」という意味ですね。

歌詞の内容をかいつまんで言うと、恋人と思われる相手に、“Any time at all, all you’ve gotta do is call, and I’ll be there” つまり、「いつでも呼んで、かけつけるから」と呼びかけている歌です。以下、日本語だけで紹介しますが、「誰かを愛する必要があるときは僕目を見て、役に立てるから」とか「悲しいときは心から同情してあげるから、電話して」というような言葉が続くのですが、個人的に気に入っているのは、「太陽が曇ってきたらまた光らせてあげよう。何でもするよ」そして、その後続く「泣きつく肩がほしいときは、それが僕の肩だったらいいな」という部分です。

これは、もちろん、優しい恋人からの呼びかけなのでしょうが、様々な喩えとしてとらえることができると思います。少し一般化すると、「助けが必要なときには遠慮なく求めな

い」ということだと思います。そして、そのために力になる人が必ず近くにいるのだということ。

これは、先ほどの「マタイによる福音書」の「狭い門」のちょっと前にある、「求めなさい。そうすれば、与えられる。」とか「門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」というような部分にも通じるのではないかと思います。

大学の教職員

残念ながら、私たち、大学の教職員は、神様、あるいは、何でもできる恋人とは、ちょっと違いますので、聖書に言うように、また、The Beatles の歌にあるように、「いつでも、どこでも、どんなときにも」ということを 100% 保証する力はありません。でも、心がけとしては、Any time at all 「いつでも」という心がけで学生の皆さんに接していきたいと思っています。

先ほどから言っているように、大学では、何よりも、自分一人で「狭い門」から入っていける人を育てたいと思っていますから、無闇に甘やかすということはありません。でも、一人立ちできる人を 4 年、あるいは大学院の場合には 2 年、という長い年月をかけて育てるので、いきなり突き離すようなこともしません。温かく、「いつでも」助けを求めに来ていんだよ、という心がけで皆さんを待っています。

大きく変わろう

今日話したことの細かい内容は、やがて忘れてしまうと思いますので、最後に要点をまとめておきたいと思います。

皆さんが入学されたこの神戸松蔭女子学院大学という学校は、多様性の土地神戸にイギリス人宣教師によって設立されました。日本的なものの良さと、キリスト教という西欧起源の普遍的な文化の両方を背景とし、自分で考え、一人立ちしていける女性として社会に出ていく人を育てていきます。「狭い門」に入って、自立して生きていける人になることを、キリスト教の愛の精神をもった教職員が助けていきます。Any time at all 「いつでも」

せっかく、神戸のキリスト教の女子大に入ったのですから、多様性を身につけて卒業して行って下さい。卒業後は、自分自身が大きく変わるだけでなく、日本の社会を変えていく力も身につけることになると思います。

新生の皆さん、ぜひ 4 年後、あるいは修士課程の人は 2 年後、には、たくましく、したたかな姿を見せて下さい。もう一度おめでとうございます。